

第3章

センター研究3 (2年計画・2年次) 学びにくさを抱えた児童生徒の理解と 学習上の配慮

－特別支援教育の視点を生かして－



目 次

I 研究の概要	
1 研究の背景	81
2 研究のねらい	81
3 研究の内容	81
II 研究の実際	
1 学びにくさを抱えた児童生徒への指導，支援に関する現状から	83
2 研修講座資料（試作版）の作成（1年次）	84
3 研修講座資料の活用と修正（2年次）	85
III 研修資料について	
1 研修資料の概要	91
2 研修資料「学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮」	91
IV 実践事例	
【事例1】小学校（通常の学級）	110
【事例2】小学校（通級指導教室）	111
【事例3】中学校（通常の学級）	112
【事例4】中学校（通級指導教室）	113
V まとめ	
1 研究の成果	115
2 課題と今後に向けて	115
■ 引用・参考文献	116

I 研究の概要

1 研究の背景

文部科学省が平成24年12月5日に公表した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」では、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合が推定値で6.5%となっており、これに該当する児童生徒以外にも、通常の学級には教育的支援を必要とする児童生徒がいる可能性が指摘されています。

令和元年の文部科学省の調査によると、特別支援学級に在籍している小・中学生が2.9%（約27万8千人）で、平成21年と比べると2.1倍、通級による指導を受けている小・中学生が1.4%（約13万3千人）で、2.5倍となっています。特別支援学校に在籍している児童生徒を合わせると5.0%（約48万6千人）が特別支援教育の対象者となっており、増加傾向にあることが分かります。また、同調査によると低学年では学習面や行動面の問題が顕在化しやすく、高学年になるにつれて様々な問題が見えにくくなる可能性があることが指摘されており、早期発見のための児童生徒理解（気づき）が重要になると考えられます。

さらに、新学習指導要領解説においては、通常の学級においても、発達障害を含む障害のある児童生徒が在籍している可能性があることを前提に、全ての教科等において一人一人の教育的ニーズに応じたきめ細かな指導や支援ができるよう、障害種別の指導の工夫のみならず各教科等の学びの過程において考えられる困難さに対する指導の工夫の意図、手立てを明確にすることが重要であると示されています。

2 研究のねらい

通常の学級において、学びにくさを抱えた児童生徒の理解を深め、学びにくさに配慮した指導ができるよう、教職員の児童生徒理解力と指導力の向上を図ります。

3 研究の内容

(1) 1年次（令和2年度）の取組

①学びにくさを抱えた児童生徒に関する調査及び分析

1)総合教育センター（以下、当センター）研修講座〔初任者研修、実践的指導力習得研修（教職2年目）、教職5年目研修、実践的指導力向上研修（教職8年目）、中堅教諭等資質向上研修〕受講者を対象にアンケート調査を実施しました。

2)調査項目については以下のとおりです。

- ・学びにくさを抱えた児童生徒がいるか。また、どのような学びにくさか。
- ・学びにくさを抱えた児童生徒について理解した上で、指導や支援ができているか。

- ・学習指導で困った経験について。
- ・有効だった指導や支援方法について。
- ・学びにくさを抱えた児童生徒の理解や指導方法について知りたいこと。

3) アンケート調査の結果を分析し、現状を把握しました。

② 研修講座への協力と次年度講座（初任者研修講座等）に向けた資料の作成

アンケート調査分析を踏まえた特別支援教育の視点からの学びにくさを抱えた児童生徒の理解と具体的対応について、次年度講座に向けた研修講座資料（試作版）を作成しました。

③ 1年次の成果の発信

当センター支援班のウェブサイトで1年次の成果を公開しました。

(2) 2年次（令和3年度）の取組

① 研修講座資料の活用と修正

1) 当センター研修講座〔初任者研修（小・中学校）、教職5年目研修（中学校）〕受講者を対象に、1年次に作成した研修講座資料（試作版）の活用を図りました。

2) 当センターの研修講座〔初任者研修（小・中学校）、教職5年目研修（小・中学校）、小・中学校新任教務主任研修、小・中学校新任研究主任研修〕において、研修講座資料（試作版）を配付し、後日、活用に関するアンケートを実施しました。

3) 活用に関するアンケート調査の結果を基に、研修講座資料の内容を修正しました。

② 学びにくさを抱えた児童生徒の理解と指導、支援方法のまとめ

1) 実践事例を交えながら、書くことに関する学びにくさを抱えた児童生徒への指導、支援方法について冊子としてまとめました。

③ 成果の発信

1) 研究内容と作成した「研修資料」を当センター支援班のウェブサイトで公開しました。

II 研究の実際

1 学びにくさを抱えた児童生徒への指導，支援に関する現状から

(1) 児童生徒が抱えている学びにくさについて

「学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮に関するアンケート」を実施し、学びにくさを抱えた児童生徒の様子や指導の現状を分析しました（令和2年度）。

設問「学級や受け持った授業で、学びにくさを抱えた児童生徒はいますか」について、全体の95%の教員が「いる」と回答しました（表1）。多くの教員が、学びにくさを抱えていると思われる児童生徒に学習指導を行う機会があることが分かりました。

また、どのような学びにくさを抱えていると感じているかについて質問したところ、児童生徒が「文章を書くこと」に対して学びにくさを抱えていると感じている教員が68%と、最も多いことが分かりました（表2）。

表1 「学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮に関するアンケート（令和2年）」より

		設問：学級や受け持った授業で、学びにくさを抱えた児童生徒はいますか。（n=450）		
		いる	いない	無回答
	全体	95%	3%	2%
校種	小学校	98%	1%	1%
	中学校	96%	2%	2%
	高等学校	89%	10%	1%

表2 児童生徒が抱えている学びにくさについて

		設問：どのような学びにくさを抱えていると感じましたか。（n=435）					
		話を聞くこと	文章を読むこと	文章を書くこと	算数（計算や図形等）が苦手	思いを伝えたり話したりする	自分の考えをまとめる
	全体	58%	45%	68%	43%	51%	42%
校種	小学校	68%	54%	76%	48%	54%	42%
	中学校	52%	44%	75%	47%	52%	49%
	高等学校	51%	32%	50%	33%	50%	35%

（複数回答）

(2) 「書くこと」について

そこで、本研究では「文章を書くこと」に着目し、児童生徒が学習上で困っている状況を把握するため、学習指導で困った経験について、更にアンケートの回答を分析しました。

アンケートの記述を分析すると、頻出単語（動詞）では、「書く」「書ける」等、「書くこと」に関する語が多いことが分かりました（表3）。「書くこと」に関する記述内容は、作文や考えを書くこと、文の構成に関する事、文章の書き方に関する事、文字の形に関する事、書く速度に関する事など、多岐にわたる記述が確認できました。そこで、児童生徒が困っている状況に関する記述と教員が学習指導において困っていることに関する記述内容を細かく分析したところ、児童生徒のつまずきの状況が分かりました（表4）。

表3 学習指導で困った経験の分析

設問：学習指導で困った経験「頻出単語（動詞）上位」

順	動詞	(回)	順	動詞	(回)
1	書く	62	7	学ぶ	21
2	困る	43	7	掛かる	21
3	分かる	39	9	聞く	19
4	通る	31	10	見る	16
5	出す	26	10	思う	16
6	書ける	23	10	抱える	16

全体では「考えをまとめて書くことが苦手」「振り返り等が書けない」など、作文に関するつまずきが最も多いことが分かりました。教員が学習指導の際に困ったこととしても、「作文指導に困った」など、「文章を書くこと」に対する悩みが多く見られることが分かりました。

表4 学習指導で困った児童生徒の状況（記述）の分析

学習指導で困った経験（記述）より「書くこと」に関する児童生徒のつまずき

	文字	表記	文法	作文	運動性	その他
全体	28%	1%	6%	35%	22%	7%
小学校	21%	3%	9%	32%	26%	9%
中学校	35%	0%	4%	43%	13%	4%
高等学校	36%	0%	0%	27%	27%	9%

文字	文字（ひらがな、カタカナ、漢字、英語）を書く際のつまずき
表記	表記（ルールの理解、特殊音節、正しい句読点等）のつまずき
文法	文の構成・文法（助詞の使い方、接続詞の使い方、前後関係の理解等）のつまずき
作文	作文（内容の構成、筋道の立て方等）の際のつまずき
運動性	運動性（筆記技能、鉛筆の握り方、手先の不器用さ、書く速さ、姿勢の保持等）のつまずき

2 研修講座資料（試作版）の作成（1年次）

研究1年次に研修講座資料（試作版）を作成しました。アンケート調査の結果とその分析を基に、最も多くの児童生徒が学びにくさを抱えており、また、最も多くの教員が学習指導の際に困ったり悩んだりしている「書くこと」に関する指導方法や支援の手立てについてまとめました。特に、つまずき場面として多かった「作文を書くこと」への指導、支援方法について内容を充実させました。

研修講座資料は、「書くこと」に関する指導方法を紹介するだけでなく、どのような場面でどのような手立てを講じると効果的であるのかなど、具体的な場面を設定して紹介することが有効であると考え、作成しました。

3 研修講座資料の活用と修正（2年次）

(1) 研修講座資料の活用について

研究2年次に、1年次に作成した研修講座資料（試作版）を研修講座で活用し、指導方法を整理することで教職員の児童生徒理解と指導力の向上に寄与できると考えました。

当センターの研修講座において活用することで、活用のしやすさや有効性、具体的指導場面や指導方法に関するニーズ等について検証を行い、修正を加えることで、更に有効性の高い資料としての質を高めていきたいと考えました。活用を図った研修講座は以下のとおりです。

○初任者研修講座（小学校A・B）【9月8日・15日】

講座名「特別な支援を要する児童生徒の理解と支援」

○初任者研修講座（中学校）【8月3日】

講座名「特別な支援を要する児童生徒の理解と支援」

○教職5年目研修講座（中学校）【7月8日】

講座名「発達障害のある生徒の理解と支援」

上記の研修講座の他に、当センターにおける連携支援事業、校内研修支援等において資料を配付し、活用しました。

(2) 研修講座資料の修正について

①活用に関するアンケートの実施

当センターの研修講座において、研修講座資料を配付し、後日アンケートを実施しました（表5）。

表5 研修講座資料の配付（一覧）

研修講座名	人数	資料配付日	アンケート回収日	備考
初任者研修講座（小学校A） 初任者研修講座（小学校B）	77名	6月2日 6月16日	11月17日 11月24日	【講座で使用】 9月8日 9月15日
初任者研修講座（中学校）	62名	7月14日	11月10日	【講座で使用】 8月3日
教職5年目研修講座（小学校）	31名	9月7日	11月9日	（オンラインで データを配付）
教職5年目研修講座（中学校）	25名	7月8日	10月19日	【講座で使用】 7月8日
小・中学校新任教務主任研修講座	62名	5月24日	11月4日	
小・中学校新任研究主任研修講座	66名	5月13日	11月12日	

受講者275名から、活用に関するアンケートの回答を回収することができました。また、受講後に学校でアンケートを実施したり、教職員からの意見をまとめたりしたデータを提供してくれた受講者もあり、貴重な意見、要望等を得ることができました。

②活用に関するアンケートより

1) 主な活用場面

資料の主な活用場面について、「授業」「学級」「校内研修」「その他」から選択し、複数回答してもらいました。最も多いのは授業の指導場面での活用で58%、続いて学級の児童生徒への活用で40%となりました。主に児童生徒への指導、支援の場面において活用されたことがう

かがえます。

また、学級担任と学級担任以外でクロス集計したところ、学級担任以外の41%が校内研修等で活用したことが分かりました（表6）。各教員が個人で活用するだけでなく、研修会資料としての活用も期待できると考えます。

表6 主な活用場面

	学級担任	学級担任以外 (研究主任・教務主任)
授業での指導場面	52%	65%
学級の児童生徒	54%	0%
校内研修等	4%	41%
その他	1%	12%

(複数回答)

2) 活用の様子

記述内容からは、研修講座資料を参考にICT活用を図った取組や、研修講座資料を参考にした指導、支援によって、児童生徒の発言が増えたなど、効果的に活用が図られた様子を確認することができました。

3) 研修講座資料の有効性等

活用に関するアンケートでは、「活用のしやすさ」「活用の有効性」「ICTの活用」について、「とてもよい」の回答が3割以上、「まあまあよい」の回答が6割以上でした（図1）。肯定的な回答が多いことから、指導、支援の手掛かりとなる研修資料として活用できると考えます。

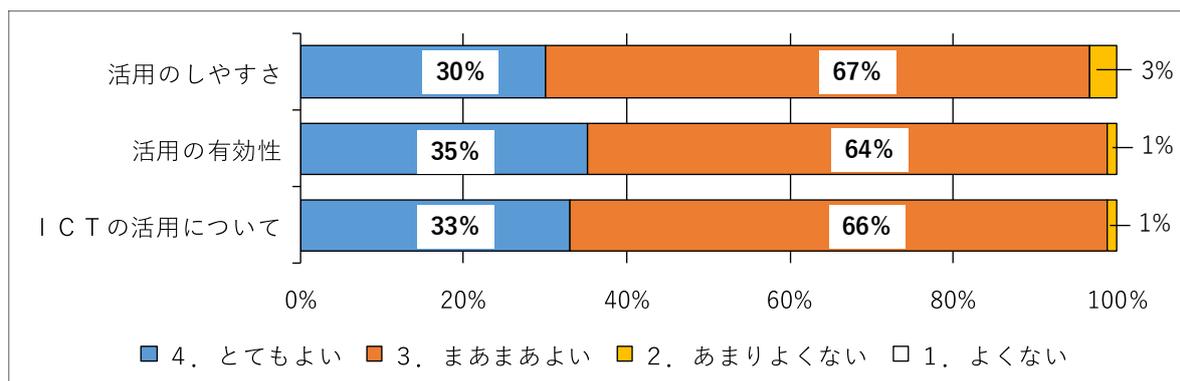


図1 活用に関するアンケート結果

4) 主な要望等

アンケートの記述を「参考になった」「要望・改善点」「追加してほしい内容」「活用場面や方法」など、内容ごとに整理しました。最も多いのは「学びにくさに応じた文房具があることを知った。」「数学でも役立つようなので、とても勉強になった。」「他にもあれば教えてほしい。」など、研修講座資料が参考になったという内容で、続いて

「更に知りたい」「もっと教えてほしい」といった内容でした。要望としては、「ワークシートのテンプレートや、ICTのそれぞれのテンプレートをいつでも使えるようにしてほしい。」などの意見がありました。

③研修講座資料の修正

活用に関するアンケートの分析結果や実践事例を基に、研修講座資料の修正を行いました。例えば、ニーズの多かった「作文を書くこと」に焦点を当て、苦手とする背景やつまずきのポイントと、それに対応する指導、支援方法について、例を挙げながら具体的に記述しました。

活用の仕方についての要望を生かし、研修講座資料で紹介した学習プリントをダウンロードできるようにしたり、タブレット等を使用した際にダウンロードして使えるように、二次元バーコードを載せたりしました。

また、今回まとめた研修講座資料は、今後各学校において校内研修等でも活用できるように「研修資料」と名称を改めました。

(3) 研修講座資料活用の流れ (例)

実際にどのように活用を図るのかを、寄せられた事例を基に整理した活用例で紹介します。中学校のM先生の事例として、支援を考える際の参考になるよう、研修講座資料活用の流れ①～⑤を示します。

①はじめに (図2)

対象生徒は、中学3年男子生徒で、教科は数学です。

生徒の気になる様子は、「最初から書くことをあきらめている」「ノートを書かない」「学習の分からない内容がそのままになっている」ことでした。

資料を読んだM先生は、「やる気だけの問題ではないのかもしれない」「書く

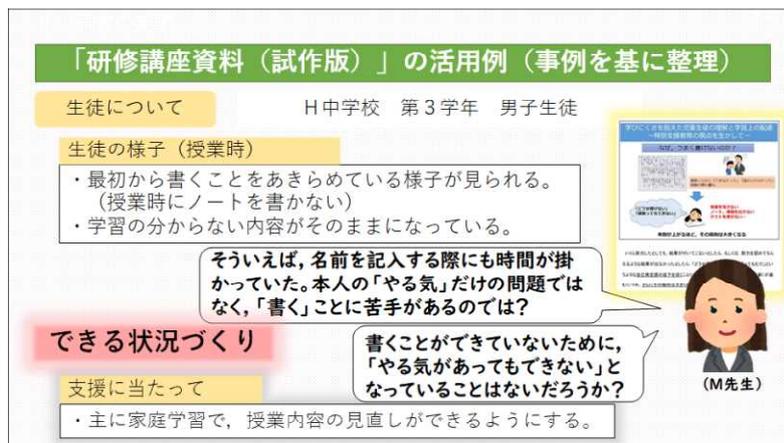


図2 研修講座資料活用の流れ①

ことに苦手意識があるのかもしれない」と感じました。支援の方向性として、書くことができないために、やる気があってもできないことがあるのかもしれないと仮定し、主に家庭学習で、授業の見直しができるようにすることを考えました。

ここでのキーワードは「できる状況づくり」です。M先生は資料を通して、「できないことをできるようにする」だけでなく、苦手なために「できない、やれないでいる」ことはないか検討することや、スタートラインに立つための支援もあることに気が付きました。

②生徒の観察 (図3)

次に、M先生は、資料にある具体的な場面と「実態」「背景」を参考に、生徒の様子を観察しました。すると「時間内に書き終わらない」「メモを書こうとしない」「板書内容

をノートに書こうとしない」といった様子が見られたことから、生徒の学びにくさを「文字を書くのが遅い」「聞きながら書くのが難しい」「板書のどこを書いているのか分からなくなる」とことと仮定しました。

ここでのキーワードは「アセスメント」です。どのような学びにくさを抱えているのか、背景を探ることが、指導・支援の手立てにつながります。

③手立ての検討 (図4)

そして、ヒントを参考に手立てを検討しました。

生徒の学びにくさの実態から、「書く時間を確保する」ことにしました。まずはできそうな内容から取り組むことにし、「授業中にノートを書く時間を設ける」「板書内容をデジタルカメラで撮影する」の二つに取り組むことにしました。

ここでのキーワードは「できそうなことから取り組む」です。実践することで、これまで気が付かなかった生徒の様子など、新たな現状も見えてきます。

④取組の見直し (図5)

しばらく実践したところで、取組状況を見直しました。

ノートを書く時間を設けたことで、ノートを書く機会は増えましたが、それでも間に合わないこともありました。デジタルカメラでの撮影は、板書をノートに書くことができなくても大丈夫という安心感がありま

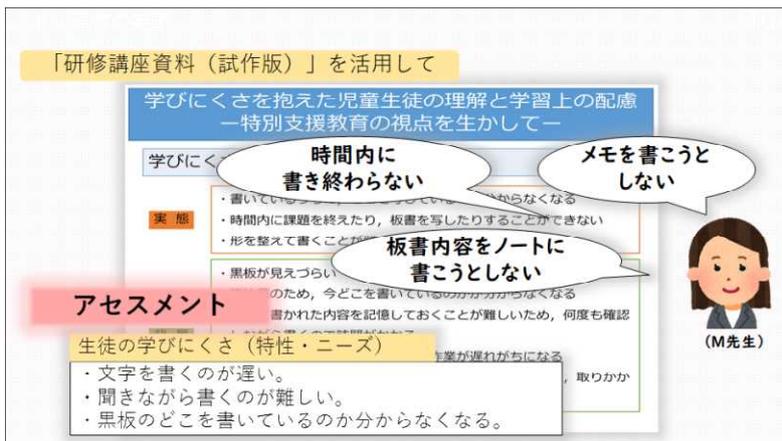


図3 研修資料活用の流れ②

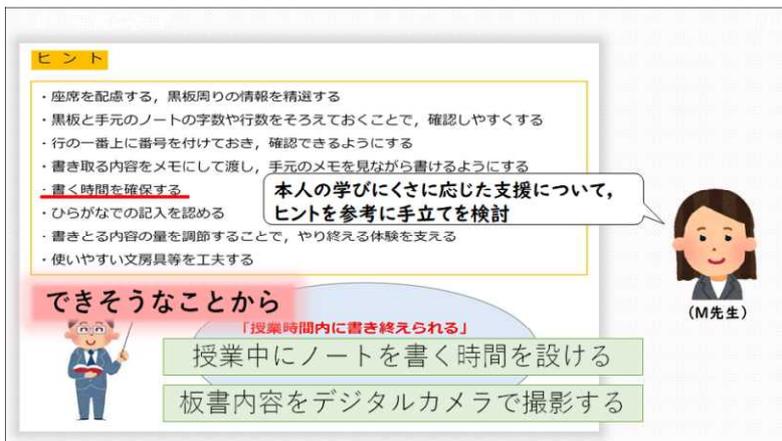


図4 研修資料活用の流れ③

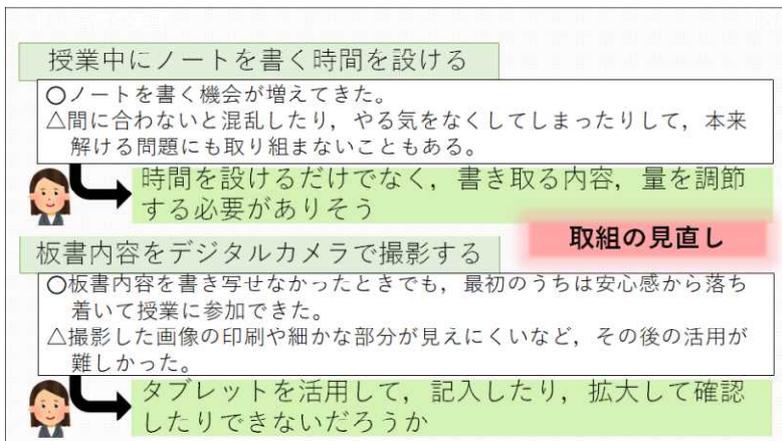


図5 研修資料活用の流れ④

したが、印刷したり、印刷したものが見えにくかったりといった課題がありました。

M先生は書く時間を設けるだけでなく、書きとる内容や量を調節する必要を感じました。また、デジタルカメラではなく、タブレットを使うことでもっと簡単に活用できるのではないかと考えました。

ここでのキーワードは「取組の見直し」です。研修資料では参考として取組例を紹介しています。しかし、取組例はあくまでも参考で、紹介されている取組が目の前の児童生徒に、そっくりそのまま当てはまることは少ないと思います。取り組んでみての調整が必要で、試行錯誤しながら、目の前の児童生徒に合わせて個々に最適な指導、支援方法を探ることが重要になります。

⑤手立ての修正 (図6)

M先生は、研修講座資料を参考にし、取組内容を修正しました。「文字を書くのが苦手」なタイプの生徒について、対応する支援方法を参考に検討しました。

問題を解きたいという生徒の意欲を生かし、できるだけ書く量を減らして、問題に取り組む時間を保障する手立てを考えました。支援の手立てとして「ノートに書き写す量を調節する」「学習プリントを準備する」ことにしました。

ここでのキーワードは「本人に合わせて調整」です。M先生は、本人の「問題を解くことは好き」という意欲を生かしています。本人の興味、関心や得意なこと、意欲を含めて調整することが大事になります。

⑥ICT活用

二つのアプリケーションを活用しました(図7)。

授業後、タブレットで板書内容を撮影します。そして、OneNoteに取り込みます(図8)。

大事だと思う部分を切り取ったり、細部を拡大したりします。M先生が指示することもありました。

生徒はOneNoteを使うことで、自宅で板書を確認できるようになり、当初の「主に家庭学習で、授業内容の見直しができるようにする」ことにつながることができました。回数を重ねる中で生徒は、

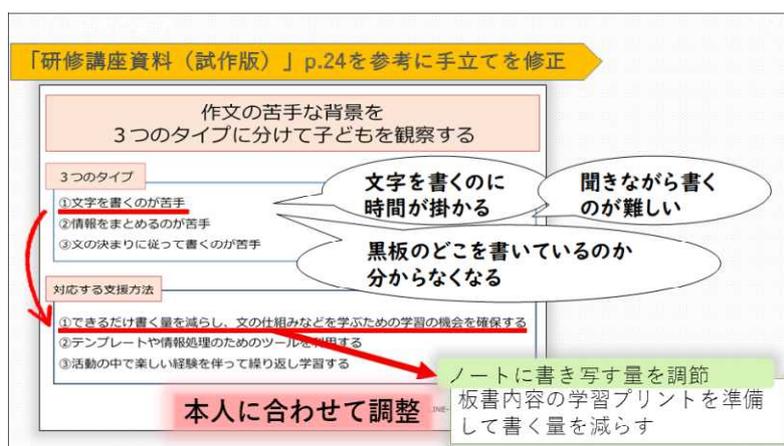


図6 研修資料活用の流れ⑤



図7 研修資料活用(ICT)

家庭でもOneNoteを使い、写真に直接線を引いたり、文字を書き込んだりしながら内容を復習するようになりました（図9）。

生徒は、意欲的に取り組んでいます。授業の内容によっては板書量が多かったり、書き込みなど途中の流れを残すことができなかつたりと、撮影しづらい状況があるといった課題が見えてきました。

M先生のを紹介します。

「板書内容を精選し、後から見ても分かりやすいように、板書構成を工夫するようになった。」など、生徒の「書くこと」に配慮した板書や授業づくりを通して、生徒の支援ができていくことがうかがえます。

以上の①から⑤，そしてICTを活用した⑥のような流れで、研修資料を活用することで、より効果的な指導，支援が行えると考えます。

研修講座資料活用の流れで示したキーワードを意識したり，研修講座資料の解説を参考にしたりすることが，学びにくさを抱えた児童生徒の理解と，指導，支援の実践につながることを期待しています。

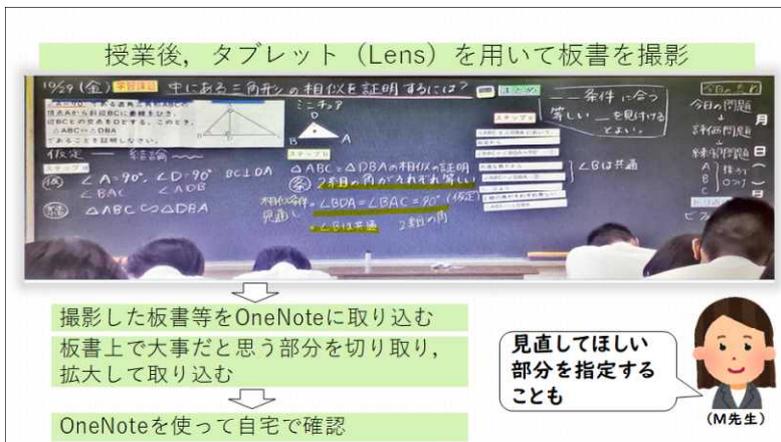


図8 研修資料活用（ICT）

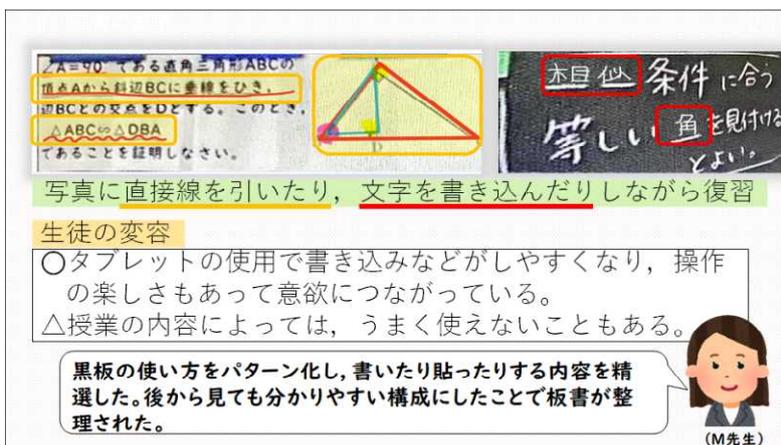


図9 研修資料活用（ICT）

Ⅲ 研修資料について

1 研修資料の概要

作成に当たっては、最も多くの児童生徒が学びにくさを抱えており、また、最も多くの教員が学習指導の際に困ったり悩んだりしている「書くこと」を取り上げ、その指導、支援の方法を整理することで、教職員の児童生徒理解と指導力の向上に寄与できると考えました。

資料として配付できるように、各スライドには説明や解説を添えています。特に、つまずき場面として最も多かった「作文を書くこと」への指導、支援方法について、充実させました。図を用いて様々な要因が複雑に関連していることを示したり、背景を示したりすることで、理解につながるようにしています。また、タイプ別に示したり、つまずきに対応する支援方法を示したりすることで、作文に関する指導、支援の手掛かりとなるようにしました。

全体の構成は、学びにくさを抱えた児童生徒の理解が深まるように、うまく書くことができない背景や「なぜうまく書けないのか」といった児童生徒の状況の理解につながるようにしました。また、学びにくさに配慮した指導の実践につながるように、「書くこと」に関する指導、支援の方法のみを紹介するだけでなく、活用できる文房具も紹介しました。

指導、支援方法を検討するに当たり、どのような場面でどのような手立てを講じると効果的かなど、具体的な場面を設定して示すことが有効であると考え、「漢字を書くこと」「文章を書く、板書を写すこと」「作文を書くこと」といった、具体的な場面ごとに「実態」「背景」「ヒント」をまとめています。

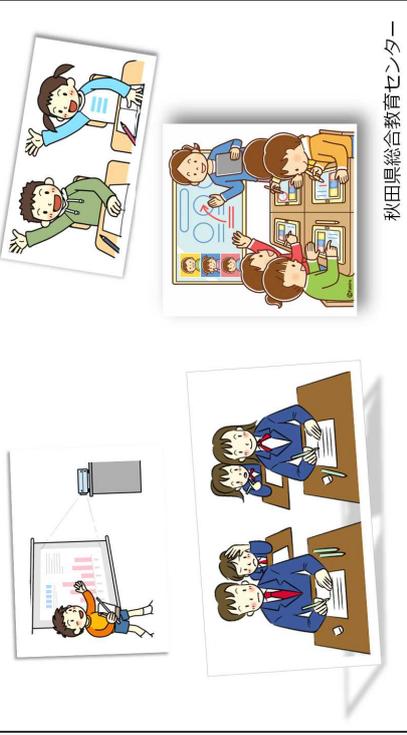
さらに、ICTを活用した指導の参考例として、1人1台端末の活用による効果やICTを活用した指導例を紹介しています。

2 研修資料

p. 92～p. 109 参照。

学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮

一特別支援教育の視点を生かして一



当センターでは、令和2年度から3年度の2年計画で、通常の学級において、学びにくさを抱えた児童生徒の理解を深め、学びにくさに配慮した指導の実践ができるよう、教職員の児童生徒理解力と指導力の向上を図ることを目的とした研究に取り組んでいます。

研究主題にありますが「学びにくさ」については、「知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示している児童生徒の状態」として研究を進めました。

具体的には、「聞き間違いがある」「適切な速さで話すことが難しい」「文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返し読みだりする」「読みにくい字を書く」「簡単な計算や暗算ができない」「学年相応の文章題を解くのが難しい」などの状態です。

学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮

学びにくさを抱える児童生徒の現状

Q どのような学びにくさを抱えていると感じましたか（複数回答可） n = 435

	聞く	読む	書く	計算する	思いを伝える	考えをまとめる
全体	58%	45%	68%	43%	51%	42%
小学校	68%	54%	76%	48%	54%	42%
中学校	52%	44%	75%	47%	52%	49%
高等学校	51%	32%	50%	33%	50%	35%

「学びにくさを抱える児童生徒に関する調査」（2020、当センター）

県内の諸学校における学びにくさを抱える児童生徒の現状を把握するために行った、当センター研修講座「初任者研修、実践的指導力習得研修（教職2年目）、教職5年目研修、実践的指導力向上研修（教職8年目）、中堅教諭等資質向上研修」受講者を対象としたアンケート調査では、文字や文章を書くことに学びにくさを抱えている児童生徒が非常に多く、また多くの教員が文章や作文の指導について悩んでいることが分かりました。

そこで、最も多くの児童生徒が学びにくさを抱えており、また、最も多くの教員が学習指導の際に困ったり悩んだりしている「書くこと」に関して指導方法を整理することで、教職員の児童生徒理解と指導力の向上に寄与できると考えました。

このスライド資料は、「書くこと」に関してどのような場面でのような手立てを講じると効果的であるのかなど、具体的な場面を設定して紹介することで、書くことに学びにくさを抱えた児童生徒の指導や支援の手掛かりとして活用していただくと期待し、研修資料として作成したものです。

学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮 —特別支援教育の視点を生かして—

なぜ、うまく書けないのか？

- ・文字の形を正確に捉えることが難しい
- ・目と手の協応が難しい
- ・力の加減が難しい
- ・黒板とノートを交互に見るなど眼球運動がうまくいかない
- ・書いてあることを一時的に記憶する力が弱い
- ・周囲に気を取られ、書くことに集中できない



ち

$$\begin{array}{r} 620 \\ + 73 \\ \hline \end{array}$$



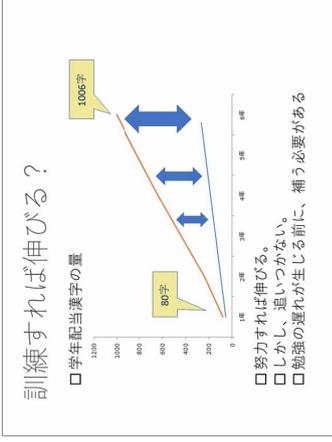
障害の有無にかかわらず、「文字が書けない」「書字が苦手」という学びにくさを抱えている児童生徒の背景には様々な要因が考えられます。担当している児童生徒について考えられる背景(要因)として、ここに示している6つの中に当てはまるものがあるとしたらどれでしょうか？

見え方(視覚)や聞こえ方(聴覚)や書字動作(運動面)のそれぞれに課題があるため、うまく書けないことが考えられます。また、複数の要因を併せ有するケースも少なくありません。

まずは、担当している児童生徒がどのような状態であるのかを知る**ことが支援の第一歩**となると考えます。

学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮 —特別支援教育の視点を生かして—

なぜ、うまく書けないのか？



【東京学芸大学附属小金井小学校ICT×インクルーシブ教育セミナー レポート②】(2019)より

読み書きが困難な子どもたちでも、努力をすれば徐々にできることは増える。

しかし、努力しても通常習得できる量には届かず、その差は埋まらないと**れる**。

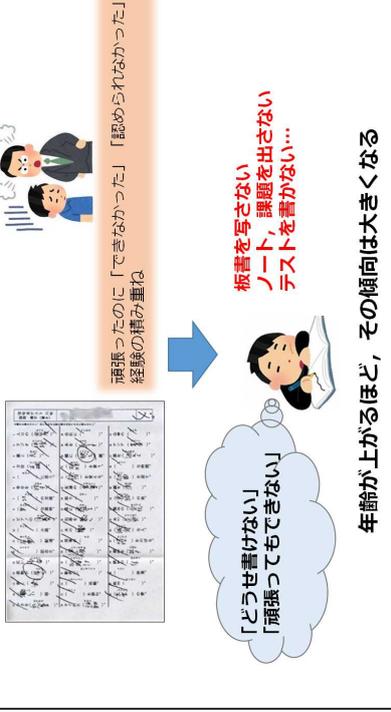


読み書きができるようになるまで、教科の学習に入るとしても難しい。そのため勉強に**遅れ**が出てしまう。

読み書きが困難で、書くことに苦手意識をもっている児童生徒でも、努力によって困難さを克服できると思われられるかもしれませんが、ここに示している図のとおり、**学年が進行するにしたがって習得できる量には大きな差が生まれること**になります。その差が大きくなってからでは、**教科の学習に大きな遅れが出てしまうこと**は明らかです。

学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮 —特別支援教育の視点を生かして—

なぜ、うまく書けないのか？



いくら努力したとしても、結果が付いてこないとしたら、もしくは、努力を認めてもらえなかつたとしたら、「どうせ書けない」とか「頑張ってもむだ」というような自己肯定感の低下を招くことになってしまいます。そして、学年(年齢)が進むにつれ、さらにその傾向は大きくなるとされています。

学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮 —特別支援教育の視点を生かして—

I C T の 活 用

平成25年度文部科学省委託「情報教育指導力向上支援事業」において、「発達障害のある子供たちのためのICT活用ハンドブック」が作成されています。指導場面毎に「通常の学級編」「通級指導教室編」「特別支援学級編」があり、学習に困難を抱える子供たちのために、このようにICTの活用を進めていけばよいのかについて、実践例が紹介されています。

(事例) A.小学校の活用

小学校において、ICT活用による学習効果の向上を図るためには、児童生徒の学習意欲を高めることが重要です。ICT活用による学習効果の向上を図るためには、児童生徒の学習意欲を高めることが重要です。

(事例) B.高等学校の活用

高等学校において、ICT活用による学習効果の向上を図るためには、児童生徒の学習意欲を高めることが重要です。ICT活用による学習効果の向上を図るためには、児童生徒の学習意欲を高めることが重要です。

「通常の学級編」におけるアンケート調査の結果です。発達障害や学びにくさを抱えた児童生徒がいる学校で、すべての児童生徒に対してタブレットPCを活用した授業を行った結果、小学校、高等学校ともICTを活用した授業の方が評価が高い傾向があります。

文部科学省から出されたICT活用のハンドブックや各種事業における報告書等の中でICTを活用した学びの推進が報告されています。パソコンやタブレット端末等のアプリを活用した学習の有効性や困難さに対応した活用の仕方などについては、現在では、民間等のウェブサイトでも数多く報告されています。

本資料でも、多くの実践事例報告の中から汎用性が高く、取り組みやすいと思われるICT活用の例を提案しています。今後、二人一台端末として多くの学校での活用・実践が見込まれることから、ICTを活用した一人一人の学びにくさへの対応は進んでいくものと考えられます。

学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮 一特別支援教育の視点を生かして一

学びにくさ 漢字を書くこと

- 実態**
- ・漢字の画数が多かったり少なかったりする
 - ・似た漢字と混同する
 - ・文字の大きさを整えたり、書く場所に合わせることが難しい
 - ・「とめ」「はね」「はらい」の区別が難しい

- 背景**
- ・不注意からの書き忘れ
 - ・大まかな形（マーク）として文字をとらえている
 - ・大まかな形として認識していても、細かな部分まで気を配れない
 - ・極端な不器用さ

- ヒント**
- ・大きな枠の中に正しく書く経験から正しい漢字を学ぶ
 - ・まずは、なぞり書きをして、正しい漢字を理解する
 - ・パーツの組み合わせによって漢字を完成させる学習を行う
 - ・細かな部分にとらわれず、その漢字の形を覚える
～筆順にはこだわらず、その漢字の形を覚える
～「とめ」や「はね」などについては、次の段階の目標にする

では、漢字を書くことが苦手な児童生徒については、どのような実態があるのでしようか。

例としてここでは4点挙げています。いずれかに当てはまる児童生徒はいるでしょうか。実態と背景については、複数の状態を併せ有するケースも少なくありません。ですので、ここにあるヒントも、一つのやり方だけでなく、いろいろな方法を試してみることが大切です。

The image is divided into three main sections. On the left, under the heading '実態' (Actual Situation), there are three panels of handwriting samples. The top panel shows the character '休' (rest) written in various sizes and orientations. The middle panel shows '全' (all) and '山' (mountain) with boxes highlighting specific parts. The bottom panel shows '女' (woman) and '休' with boxes highlighting specific parts. On the right, under the heading 'ヒント' (Hint), there is a large character '教' (teach) with a grid overlay. Below it, the characters '言' (speech) and '舌' (tongue) are shown with arrows pointing to their respective parts in the '教' character. Text below the hint says 'パーツの組合せを利用して書く' (Write using the combination of parts) and 'マスを4つのブロックに分ける' (Divide the grid into 4 blocks).

例えば、ここにある写真について、前のスライドにある実態が少なくとも二つ以上認められます。

「へん」と「つくり」とを分けて、パーツとして組み合わせる方法や、漢字をだいたい形として認識している場合、細かな部分までも意識できるように、4つのブロックに分けて認識できるような工夫も有効です。

また、実態や習得段階によっては、筆順の他、「とめ」「はね」「はらい」など細かい部分は、その先の課題や目標として、あまりこだわらずに、まずは大まかな形を覚えることを目標として取り組むようにすることも大切です。

ICT活用による支援

「デジタル教科書」(教育出版) 筆順アニメーションによって、読み方と使い方、部首の確認ができる

小学生かんじ：ゆびどりりル (NEXTBOOK, Inc.)
1年生から6年生までの漢字を学べるアプリ。書き順や面教、読み仮名等が学べる。間違えたときには、アプリが指摘してくれる

ICTを活用した支援については、現在、学習者用デジタル教科書が普及し始めてきています。発行者によって異なりますが、学習者用デジタル教材と一体的に使用することで、漢字の読み書きがアニメーションによって学習できるようになるなど、学習効果が上がります。提供については、地域の教育委員会の管理者に確認をしてみてください。

また、デジタル教材は多種多様なアプリを各サイトからダウンロードできます。

ICT活用による支援

文部科学省「電子黒板を活用した授業実践に関する調査研究」授業がもつよくなる電子黒板活用

日本マイクソフト
> アクセシビリティ
> 学習に困難のある子ども
のICT活用情報
> 学習に役立つツールと活
用例
> Power Pointを使った漢
字学習「書き順スライド」

電子黒板を使った一斉授業の事例も多く報告されるようになりました。具体的な活用方法については文部科学省の報告等で紹介されています。

学校の学習用パソコンに標準的にインストールされているワープロやプレゼンテーションなどのソフトを活用した支援についても数多く紹介されています。

ここで紹介している日本マイクソフト社のウェブサイトでは「学習においてICTを活用する際の役立つツールや活用例」「学習における困難を支援するICT活用ガイド」「特別支援教育向け Windows アプリ一覧」等を掲載し、ICTの活用について幅広く紹介しています。

学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮 —特別支援教育の視点を生かして—

学びにくさ 文章を書く、板書を書くこと

- 実 感**
- ・書いているうちに、どこを写しているのかわからなくなる
 - ・時間内に課題を終えたり、板書を写したりすることができない
 - ・形を整えて書くことが難しい

- 背 景**
- ・黒板が見えづらい
 - ・不注意のため、今どこを書いているのかわからなくなる
 - ・黒板に書かれた内容を記憶しておくことが難しいため、何度も確認しながら書くので時間がかかる
 - ・時間配分の見通しが立ちにくく、作業が遅れがちになる
 - ・書き終えられない経験を重ねていく中で、意欲が低下し、取りかかりが難しくなっている

文章を書くときや板書などを書き写すときなどにも学びにくさを抱えている児童生徒が多くなると考えられます。

書くこと自体に課題、例えば書字に極端に時間を要するとか、書き写している途中で、どこまで進んだかわからなくなるなど、不器用さ(運動面)や視算の問題、記憶力、注意力等に課題があり、書くことに学びにくさを抱えているケースです。

ヒ ント

- ・座席を配慮する、黒板周りの情報を精選する
- ・黒板と手元のノートの字数や行数をそろえておくことで、確認しやすくする
- ・行の一番上に番号を付けておき、確認できるようにする
- ・書き取る内容をメモにして渡し、手元のメモを見ながら書けるようにする
- ・書く時間を確保する
- ・ひらがなでの記入を認める
- ・書きとる内容の量を調節することで、やり終える体験を支える
- ・使いやすい文房具等を工夫する



「授業時間内に書き終えられる」
「あとから見返したとき、
書いた内容が分かる」

ことを目指しましょう

そういったケースでは、書いている途中に意欲が低下したり集中力が続かなくて諦めてしまったりすることが少なくなく、徐々に自己肯定感が低くなってしまいます。

自己肯定感が損なわれた子どもは、学習意欲が低下するだけではなく、対人関係などにおいても様々な不適応が起こりやすくなり、問題を深刻にしてしまいます。

書くことに苦手意識が強くなったり、意欲や自信をなくしてしまったりする前に、個別に必要な配慮を行うことで、やり終える体験を積み重ねることが重要です。

ヒント～学びにくさに応じた文房具の工夫

<p>「ノート」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・白い用紙をまぶしく感じる ・書いているうちに色が分からなくなる ・罫が広い方が書きやすい ・筆圧が弱くても書きやすい、見やすい 	<p>濃い色の罫線や各種の罫線による識別しやすしノート</p>
<p>「定規」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「0」を合わせられない ・押さえる力が弱い 	<ul style="list-style-type: none"> ・目盛りがうまく読めない
<p>「太芯シャープペン」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・筆圧が極端に強い、弱い 	<p>左端が0目盛りで合わせやすい</p> <p>押さえやすく滑らない</p> <p>白黒両方で目盛が見やすい</p>
<p>「電動消しゴム」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うまく紙を押さえられない ・消す力加減のコントロールが難しい 	<p>力を入れても芯が折れにくい</p> <p>力を入れなくても正確に修正できる</p>

書く作業そのものや書くことに対する抵抗感など、様々な負担を軽減できる教材・教具があります。

見ることに困難さがある人に眼鏡があるように、書くことに困難さがある児童生徒には、その困難さに応じた教材・教具等の工夫があります。ここで紹介しているものは、文房具屋等で普通に手に入るものがほとんどです。

指導に当たり、「ないからできない」から「あるとできる」への思考の変換が大切です。

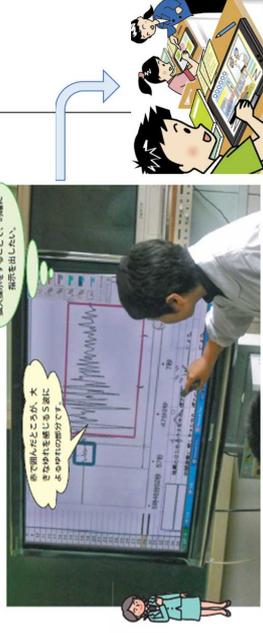
ICT活用による支援

電子黒板の活用

3. 明確に伝える

資料の図を大きく映し、着目するところを示す

ワークシートの図表は小さく、本文部分を大きくすることで、明確に指示を出したい。



文部科学省「電子黒板を活用した授業実践に関する調査研究」授業がもつとよくなる電子黒板活用 より

板書を全体的に拡大もしくは、グラフや表など、必要な部分を拡大して提示することで、児童生徒が、どの部分に注目すればよいのか、または、どの部分を書き写すのかについて分かりやすくなります。

必要に応じて、児童生徒のタブレットなどと同じ画面を映し出し、手元で確認できるようにすることで、板書を書き写す負担を軽減することができます。

ICT活用による支援

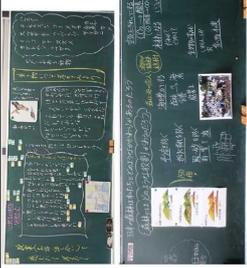
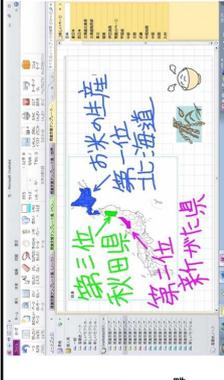


Microsoft Lens (Microsoft)
紙の文書やホワイトボードに書かれた文書をスマートフォンやタブレットで撮影しPDFやWordにしたり、OneNoteなどに保存したりすることが簡単にできる。



OneNote (Microsoft)
デジタルノートアプリ。図を貼ったり手書きで書いたりキーボードで入力したり、得意な方法で見返しがしやすいノート

板書を撮影
ノートとして保存

ノートをとるのに時間がかかってしまう場合など、デジタルノートアプリを使用することで、黒板を写真にとってから書き写したり整理したり、図を貼ったり手書きで書いたりキーボードで入力したり、得意な方法で見返しがしやすいノートを作成できます。実際の使い方などについては、動画サイトで多数紹介されています。

ICT活用による支援



国の名前



フランス

↑

「Power Point」(Microsoft)によるノートのテンプレート例(社会科)。入力することで書く負担の軽減ができる。枠があることで見直しをもってまとめてあげることができ、見直ししたときも分かりやすい。



タブレット端末の手書き入力機能。手書きの文字を正しく変換したり、読み方を調べたりすることができる。入力したものを文書ファイルに取り込むことでノートやレポートの作成も可能。
Windows (Microsoft)

タブレット端末の手書き入力機能。手書きの文字を正しく変換したり、読み方を調べたりすることができる。入力したものを文書ファイルに取り込むことでノートやレポートの作成も可能。
Windows (Microsoft)

前スライドと同様、マイクロソフト社のウェブサイトでは、学習に役立つツールと活用例について多数紹介しています。

また、国立特別支援教育総合研究所「特別支援教育教材ポータルサイト」では、特別支援教育の教材や支援機器、学校でのICT活用に実践事例などを多数紹介しています。



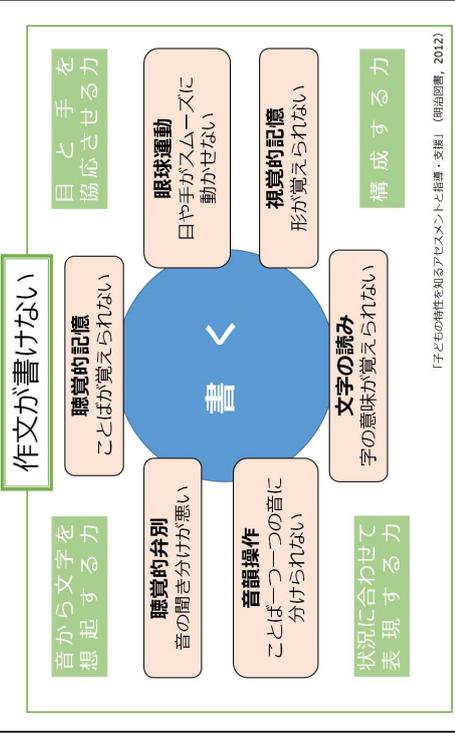
支援教材ポータル
NISE 特別支援教育教材ポータルサイト

このサイトでは、特別支援教育の教材や支援機器、学校での実践事例をご紹介しています。

- 教材・支援機器を探す
- 実践事例を探す

教材・支援機器に関する情報
教材・実践事例に関する情報

学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮 —特別支援教育の視点を生かして—



今回の調査では、学びにくさを抱えた児童生徒への学習指導において、作文指導について具体的な支援方法が分からずに困っている教員の割合が多いたことが分かりました。

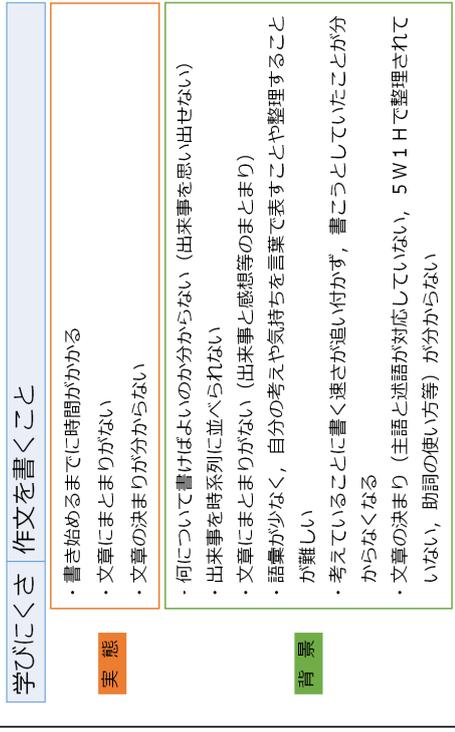
ここからは、「作文を書くこと」に、より焦点を当てた指導・支援について紹介します。

この図は、作文が書けない要因や背景について表したものです。

前述のとおり、書くことについては、視覚や聴覚の他、読むことや書字動作などの運動面など、様々な要因が関連しています。

この図に表されているように、作文が苦手な児童生徒には、様々な要因が複雑に関連しているため、一人一人の学びにくさやその要因・背景が異なります。

学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮 —特別支援教育の視点を生かして—

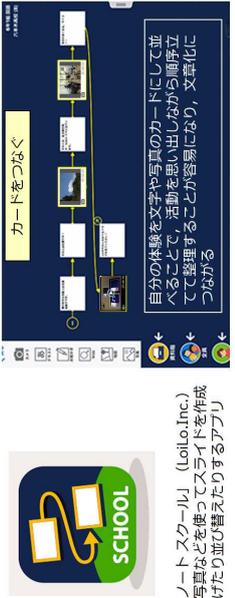


学びにくさの実態に対する背景としては、ここに示したように、記憶の問題によるものと、出来事を時間に沿って順に並べることが難しい場合、主語と述語の対応や助詞の使い方など文章の決まりに従って書くことに課題がある場合などが考えられます。

ICT活用による支援



- ・カメラアプリを使って授業の様子などを撮影しておく
- ・画像を構面ごとに振り回りながら、その時の様子や気持ちなどを思い出すことができるような質問をする
- ・教師とのやりとりの中で出てきたキーワードを書きとめ、付箋に記入してノートに張る
- ・出来事を時系列に並べながら、助詞の使い方などに注意を払って作文をしていく



「ロイノートスクール」(Loilo,Inc.)
文字や写真などを使ってスライドを作成し、つなげたり並び替えたりするアプリ

カードをつなぐ

自分の体験を文字や写真のカードにして並べること、活動を思い出しながら順序立てて整理することが容易になり、文章化につなげる

出来事を想起させることが難しい児童生徒には、カメラアプリを使用して写真を見ながら質問に答えさせるような方法やキーワードを付箋に書いてノートに張り、後で時系列に並べ替える方法などがあります。

また、画面上に写真や付箋のような物を張り付けて時系列に並べ替えたり、内容を整理したりできるアプリもあります。書くことを軽減し、ICT機器を操作する楽しさを感じることで、作文を書くことに対する抵抗感を軽減できます。

作文の苦手な背景を

3つのタイプに分けて子どもを観察する

3つのタイプ

- ①文字を書くのが苦手
- ②情報をまとめるのが苦手
- ③文の決まりに従って書くのが苦手

対応する支援方法

- ①できるだけ書く量を減らし、文の仕組みなどを学ぶための学習の機会を確保する
- ②テンプレートや情報処理のためのツールを利用する
- ③活動の中で楽しい経験を伴って繰り返し学習する

奥塩浩(2020) NPO法人いっしょ 児童のクラスメイトs.2020 ONLINE-3 「夏の作文支援大作戦」
奥塩浩(2020 - 2021) 『実践報告集報告』 Gakken

ここからは、学習支援教室「まなびルーム ポラリス」主宰の奥塩浩先生の資料を参考に、作文指導についてまとめたものを紹介します。

なお、ここで紹介する各ワークシートについては、奥塩先生から了解を得ていますので、そのまま活用していただいています。ただし、児童生徒の実態に合ったワークシートを作成することが望ましいことは言うまでもありません。

ここでは、作文を苦手とする児童生徒には3つのタイプがあり、そのタイプに応じた支援の方法が提案されています。

作文の4つのつまずきに対応する支援方法

4つのつまずき

- ① 作文に書くための出来事を思い出すのが難しい
- ② 出来事を時系列に並べることが難しい
- ③ 何についてどのくらい書けばよいか分からない
- ④ 主語と述語の対応や助詞の使い方がうまくできない

対応する支援方法

- ① 写真や動画、パンフレットやしおりなど、思い出すための手掛かりを手元に置いておく
- ② 時系列に沿って出来事を分けられるワークシートを準備する
- ③ 出来事をブロック分けして書く配分を決める
- ④ 空欄を埋めるような形式の下書き用のワークシートを準備する

湘尾啓(2020) NPO法人いご屋 発達クラスツクス「2020 ONLINE-3」[夏の作文支援大作戦]
赤尾浩(2020・2021) 『実践障害者支援』 Gakken

また、作文には4つのつまずきやすいステップがあるとして、そのステップに応じた支援の方法が提案されています。

4つのステップを頭の中だけで行おうとせずに行っている場合が多いということを前提とし、①から④に応じて、ICT活用やワークシート等の紹介しています。

では、その4つのつまずきごとに見ていきます。

① 作文に書くための出来事を思い出すのが難しい

- 写真や動画、パンフレットやしおりなど、思い出すための手掛かりを手元に置いておく



つまずき①「作文に書くために出来事を思い出すのが難しい」児童生徒に対応する支援方法については、写真や動画、パンフレットやしおりなど、思い出すための手掛かりを手元に置いておくことが有効です。

②出来事を時系列に並べることが難しい

- ▶ 時系列に沿って出来事を分けられるワークシートを準備する

① 出発前	② 到着まで	③ についてから	④ 帰ってから
①	②	③	④

つまり②「出来事を思い出し時系列に並べることが難しい」児童生徒に対しては、思い出す手掛かり(写真や行事のしおり、パンフレット等)の提示と一緒に、下書き用のワークシートを活用して書き始めることで、思い出しながら書くことへの負担を軽減できます。

①から④までの順で、書く内容についても目で見て分量が分かるように枠の大きさを変えとより分かりやすくなります。

③何についてどのくらい書けばよいか分からない

- ▶ 出来事をブロック分けして書く配分を決める

①行事があった日づけ	②なんの行事
③やったこと(3つ選ぶ)	
いつ だれが なにを	いつ だれが なにを

つまり③「何についてどのくらい書けばよいか分からない」児童生徒、つまり、出来事を時系列に並べて(羅列して)書くだけで終わってしまう場合、作文の中で伝えたい情報として、書く場面とその時の気持ちを見える形で整理するためのシートの活用が有効です。

出来事をブロック分けするには、「嬉しかったこと」や「頑張ったこと」などの感情で分ける方法と、「一番長く活動したこと」など、活動時間の長さで分ける方法の2つの方法があります。

感情で分ける方法が苦手な児童生徒の場合は、活動時間の長さでまとめる方が抵抗感が少ない場合があります。

活動のポイント

- ① 子どもたちにとって身近なテーマを選ぶ
- ② 手順のステップを少なくする
- ③ 文の型を決めておく
- ④ 活動の意味を伝える
- ⑤ 「ヒントカード」を用意する

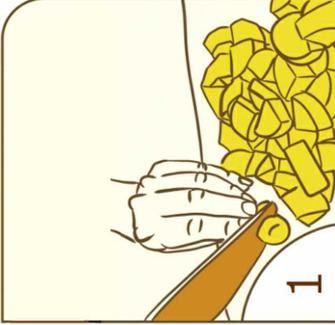
【実践がんごんの特別支援教育2021年9月号】 Gakken

「手順表を作る活動」のポイントは、次のとおりです。

- ① 児童生徒が見たことがあったり、体験したことがあったりするような身近なテーマにする
と取り組みやすくなります。
- ② 最初は、5つぐらいのステップまでとすると扱いやすくなります。
- ③ 基本の文の型を「いつ（最初に、次になど）、なにをどうする」と決めておくことで、取り組
みやすくなります。
- ④ 単に「手順書を作ろう」だけでは、何に何を付けたらよいかイメージしにくいいため、「手
順書を読んだ人がうまく作れるように、順番とやることに気を付けて書いてみよう」というよ
うな説明をして活動の意味を理解しやすいようにします。
- ⑤ 「いつ」「なにを」「どうする」をキーワードとして、必要に応じて「ヒントカード」として提
示することで、カードを見ながら文を作ることができるようにします。また、文を書き終えた
後に、「いつ なにを どうする」の中で抜けているものはないか、自分でチェックすることが
できます。

カレーライスの作り方

① **さいしよに**、ゴロゴロと
大きめに材料を切ります。



いつ → **さいしよに**
なにを → **材料を**
どうする → **切ります**

書き始めのうちは、「いつ なにを どうする」について、すぐに思い出せないことが
多いため、一つの工程に一枚のヒントカードを用意します。

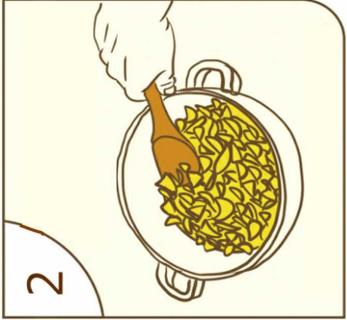
ヒントカードを見て、「いつ」「なにを」「どうする」の3点を文に入れるように指示
をします。

1枚目の手順表のみ、「さいしよに ゴロゴロと 大きめに 材料を 切ります。」とい
うように、指導者が手本となるように、文を読み上げると、児童生徒が、その後、安
心して活動に取り組めるようになります。

不安が強い児童生徒には、文章の手本を提示することで、不安が軽減されること
が考えられます。

カレーライスの作り方

② つぎに、バターで玉ねぎ、ニンニク、肉を炒めます。
それから、野菜を炒めます。



2

いつ	つぎに	それから
なにを	玉ねぎ、ニンニク、肉	野菜
どうする	炒めます	炒めます

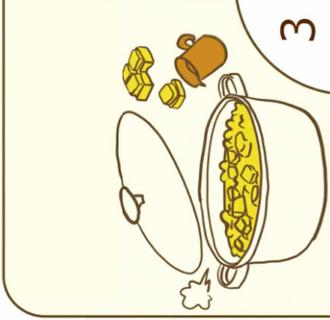
レベルアップするとすれば、「それから」などを使って、文を付け加えることが考えられます。

また、「分量」や「気を付ける点」を追加することで、さらなるレベルアップが図られます。

分量であれば、「ニンニクを1個」、気を付ける点であれば、「こげないように、炒めます。」などです。

カレーライスの作り方

③ つぎに、水とカレールーを入れてから、じっくりと煮込みます。

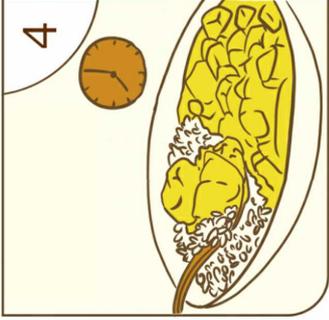


3

いつ	つぎに
なにを	水とカレールー
どうする	入れて煮込みます

また、「から」などを使って、文をつなげる活動を試みながら、徐々にレベルアップを図ってみることもできます。

カレーライスの作り方

④  **さいごに**、皿に盛り付けて、
いただきます。

ちなみに、一晩寝かせたら、
さらにおいしくなります。

いつ  **さいごに**
どうする  盛り付けて
いただきます  **ちなみに**  一晩寝かせたら・・・

この活動は、ものごとを時系列に整理し、順番に文にして説明していくコツを知ることが目標になります。

作文を書くことに苦手意識をもっている児童生徒は少なくありません、そのような児童生徒にとっては、白紙の原稿用紙にいきなり書き始めることは容易ではありません。書くことに苦手意識が強くなったり、意欲や自信をなくしてしまったりする前に、今回紹介した支援の方法を参考に、書くことへの抵抗感や負担感を少しでも軽減し、やり終えた達成感と自信の積み重ねによって、自己肯定感を高められるような指導を行ってほしいと願っています。

ここに掲載している支援方法等について、ご不明の点があれば、当センター支援班まで、いつでもお問い合わせください。

IV 実践事例

本研究で示す実践事例は、あくまで参考用にまとめたものです。指導・支援方法については、模範例ではありませんので、実践例の一つとして参考にしてください。

【事例1】小学校（通常の学級）

(1) 授業について

教科名等 「国語」（作文）

(2) 児童の実態について

①学年 4年生

②児童の学びにくさ（特性・ニーズ）

障害の診断はないが、文書や作文を書くことが困難で苦手意識が強い。話すことや質問内容について考えて答えることには問題がないが、注意の集中や持続が難しく不注意や早合点によるミスが多い。

(3) 学びにくさに応じた支援について

①支援機器や教材・教具等

タブレット（カメラ・写真機能）、付箋、ワークシート（図8）

②活用のねらい

作文に対する苦手意識を軽減し、自分で考えて書ける部分を増やす。

③授業における支援内容

行事の写真を見ながら印象的な出来事を思い出し、キーワードとして付箋紙に書き出した。複数枚の付箋紙によるメモをワークシートの枠の中に時系列に並べることで、出来事を整理しながら作文の内容を考えるようにした。

④児童の変容等

教師が提示した行事写真の中から思い出に残っている写真を選び出し、その出来事をキーワードにまとめたことで、白紙から文章を考えて書くことに対する苦手意識が軽減された。ワークシートを使って教師（支援員）の質問に答えながら時系列に並べたことで、文章の組み立て方も分かってきている。

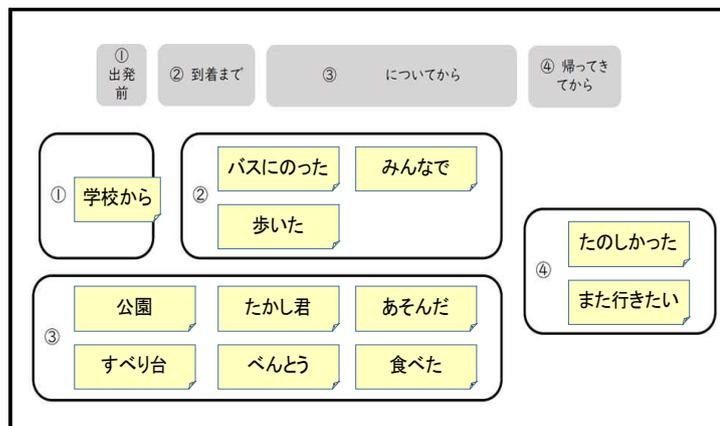


図10 出来事を時系列で整理するワークシート

【事例2】小学校（通級指導教室）

【通級指導教室について】

LD等を対象とした自校通級指導教室には、現在4名の児童が在籍している。

通級指導教室では、日常的にタブレット型コンピュータを使用しており、児童の特徴や状況に応じて使い方を工夫している。

(1) 授業について

教科名等 「自立活動」

(2) 生徒の実態について

①学年 5年生2名

②児童の学びにくさ（特性・ニーズ）

1名はLDの診断があり、1名は診断なし。2名とも話すことや話を聞くことに問題はないが、書くことが困難で苦手意識が強い。また、自己評価が低かったり自信がなかったりする上、学習への意欲も低い。

(3) 学びにくさに応じた支援について

①支援機器や教材・教具等

iPad（メモ機能）

②活用のねらい

iPad等のメモ機能を使うことで「書くこと」への苦手意識を軽減するとともに、学習に対する意欲の向上を図る。

③授業における支援内容

iPadを使用することで学習に対する意欲を高める。メモの機能を使い、書きたいことに関連する単語を音声で入力した。その後で、入力した単語を見て内容や構成について考えながら作文を書くことができた。長文のメモは苦手であったが、単語の音声入力は抵抗感を示すことなくできた。また、本人のペースで書く作業を進められるよう配慮した（図9）。

④児童の変容等

書くことに困難のある児童が、書きたいことを音声で入力し、それを見ながら書き写した。児童は、自分のペースで入力したり文字の大きさを調整したりしながら書き写すことで「iPadがあれば楽だ。もう一人でも書けるかも」と話している。



図11 音声入力の画面

【事例3】中学校（通常の学級）

(1) 授業について

教科名等「数学」

(2) 生徒の実態について

①学年 3年生

②生徒の学びにくさ（特性・ニーズ）

文字を書くのが遅い。聞きながら書くことも難しく、何の話を聞いているのか黒板のどこを書いているのか分からなくなる。最近は最初から書くことをあきらめている様子も見られるようになってきた。

(3) 学びにくさに応じた支援について

①支援機器や教材・教具等

Microsoft Lens, OneNote（本人のタブレット端末を使用）

②活用のねらい

主として家庭学習で、授業内容の見直しに使用する。

③授業における支援内容

授業中または授業後に板書をLensで撮影する。内容によって、その場で考えを入力したり、自宅でOneNoteに取り込んで課題をやり直したり、まとめを書き込んだりして振り返りをする（図10）。

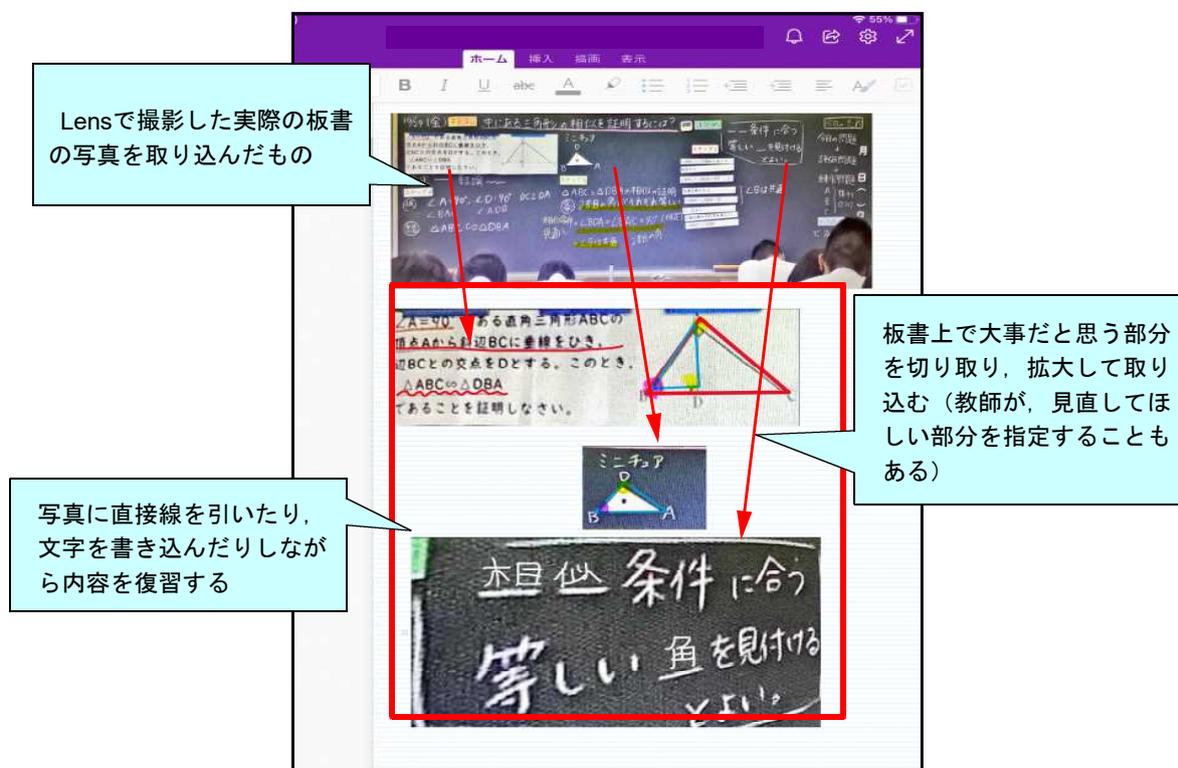


図12 OneNoteでの振り返りのイメージ

④生徒の変容等

授業中にもノートを書く時間は設けていたが、それでも間に合わないと混乱したり、やる気をなくしたりしてしまい、本来解ける問題にも取り組まなくなっていた。これまでは板書をデジタルカメラで撮影して残すことがあったが、その後の活用が難しかった。タブレットの使用により、簡単に拡大して見ることができたり書き込みなどがしやすくなったりした。操作の楽しさもあって学習への意欲につながっている。授業の内容によっては、うまく使えないこともあるため、活用の仕方については本人と相談し、より広げていきたい。

黒板の使い方をパターン化し、書いたり貼ったりする内容を精選したり、後から見ても分かりやすい構成にしたりしたことで板書が整理された。

【事例4】中学校（通級指導教室）

(1) 授業について

教科名等 「自立活動」

環境の把握(2)感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること
身体の動き(3)日常生活に必要な基本動作に関すること

(2) 生徒の実態について

①学年 1年生（他校からの通級）

②生徒の学びにくさ（特性・ニーズ）

テストなどの解答欄の大きさに合わせて文字を書くことが難しい。これまでは解答欄を拡大するなどして対応してきたが、書くことへの苦手意識が先立ち、意欲的な取組はできていなかった。学校でのタブレット端末導入をきっかけにICT機器の使用を検討した。

(3) 学びにくさに応じた支援について

①支援機器や教材・教具等

パソコンへの入力（Power Point, Word等へのプリント取り込み）

②活用のねらい

Power Point等に取り込んだ学習プリントに生徒が解答を入力する練習をさせるとともに、日常の学習場面での活用の仕方を探る。

③授業における支援内容

授業でのICT活用を考えたとき、本人が機器の操作や入力に不慣れであり、また、ICTを日常の授業でどのように使用するかの検討も必要であった。そこで、まずは使用経験のあるパソコンを使って本人の得意な数学の問題の解答を入力する練習を行った。

入力用プリントについては学級担任と内容を相談し、通級指導教室担当が作成した(図11)。

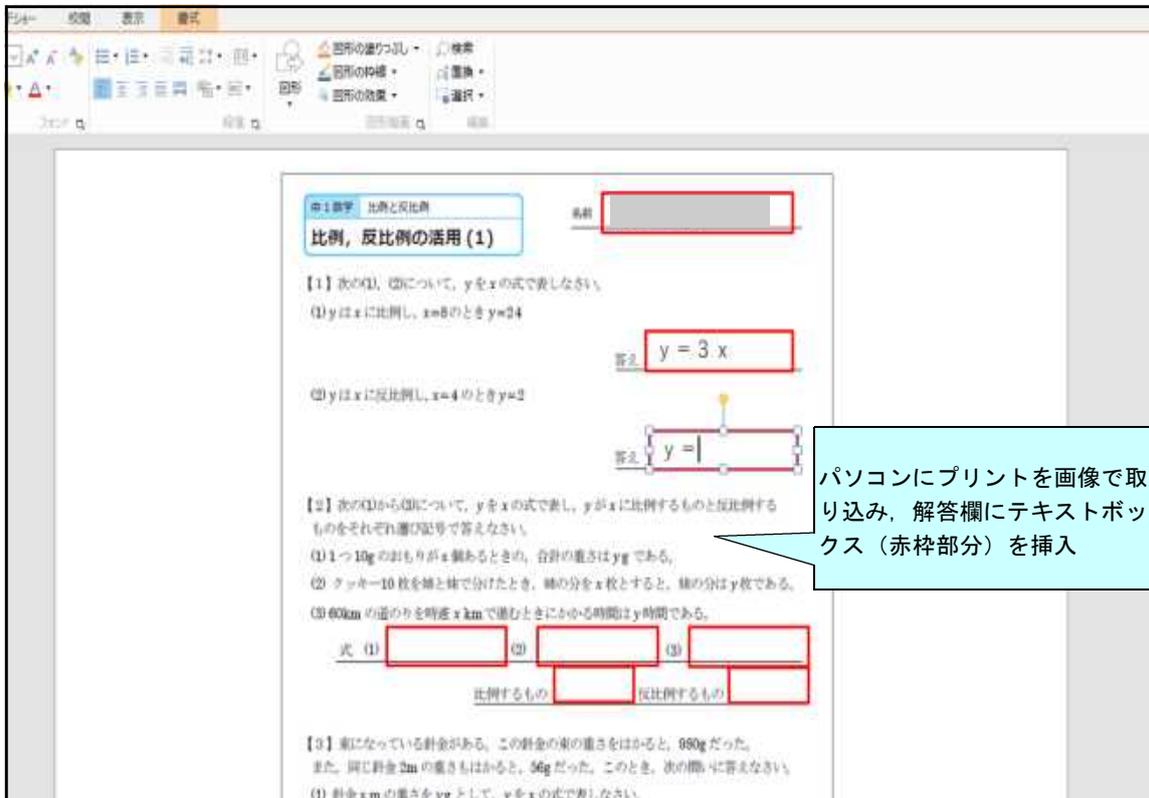


図13 入力用画面の例 (Power Point)

④生徒の変容等

本人はパソコンの使用について意欲的で、家庭でも練習するなどして操作も入力も上達しているが、現状では入力しやすいものを選んで試している段階で、実際のテスト等での活用までには至っていない。各教科でどのような使い方ができるか検討が必要である。

V まとめ

1 研究の成果

2年次は、学びにくさを抱えた児童生徒への指導、支援方法に関する研修資料をまとめました。活用した方々の声から、学びにくさを抱えた児童生徒の背景に応じた指導、支援の実践の手掛かりとなる資料を作成することができたと感じています。

また、研修資料を通して、ICTを活用した指導、支援方法を示すことができました。それによって、ICTを活用した指導、支援につなげることができました。

2 課題と今後に向けて

今回、コロナ禍による制限もあり、研修資料の活用や実践事例の収集が思ったようにはできませんでした。研究は2年で終わりますが、今後も継続して活用を図りながら情報を収集し、修正していきたいと思います。

作成した研修資料をどのように活用につなげていくかが課題だと考えます。今回、研修資料の有効性を検証するために、実際に印刷して配付したことが活用につながるきっかけとなりました。来年度以降も研修講座や各研修会で紹介したり、配付したりすることで活用のきっかけになることを期待しています。

活用した方々からの要望には、書くこと以外の学びにくさへの指導、支援方法について知りたいという声もあったことから、様々な学びにくさに対応した情報を発信できるようにしたいと思います。

<引用・参考文献>

- 澳塩渚(2020)『夏の作文攻略大作戦』いろ葉 発達クラスタ Fes. 2020.
- 澳塩渚(2020・2021)『実践障害児教育 文で表す力をつける教材だからこ作文を書くためのサポート』Gakken.
- 京都府総合教育センター(2011)『〈特別支援教育ガイドブック〉読める!書ける!~すべての子どもが楽に読み書きを学ぶために~』.
- 国立特別支援教育総合研究所(2010)『小中学校等における発達障害のある子どもへの教科教育等の支援に関する研究 平成20~21年度 研究成果報告書』.
- 滋賀県教育委員会(2019)『特別支援教育の視点を生かした授業づくりヒント集』.
- 千葉県教育委員会(2017)『合理的配慮事例集~小中学校の通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒の事例を中心に~』.
- 月森久江編集(2006)『教室でできる特別支援教育のアイデア 中学校編』図書文化社.
- 筑波大学(2014)『発達障害のある子供たちのためのICT活用ハンドブック 通常の学級編』平成25年度文部科学省調査研究委託事業.
- 樋口耕一(2020)『社会調査のための計量テキスト分析【第2版】内容分析の継承と発展を目指して』株式会社ナカニシヤ出版.
- 兵庫教育大学(2014)『発達障害のある子供たちのためのICT活用ハンドブック 特別支援学級編』平成25年度文部科学省調査研究委託事業.
- 光村教育図書(2020)『書くカトレーニング うっしまる』.
- 宮城教育大学(2014)『発達障害のある子供たちのためのICT活用ハンドブック 通級指導教室編』平成25年度文部科学省調査研究委託事業.
- 文部科学省(2014)『電子黒板を活用した授業実践に関する調査研究 授業がもっとよくなる電子黒板活用』.
- 文部科学省(2013)『教育支援資料』.
- 文部科学省初等中教育局特別支援教育課(2020)『特別支援教育の充実について』第44回全国特別支援教育センター協議会研究協議会(青森県大会)講話資料.
- 学習における困難を支援するICT活用ガイド 日本マイクロソフト株式会社. http://download.microsoft.com/download/D/B/2/DB265C22-9E6B-467E-9368-73301E5FAC69/enable_study.pdf
- 学習に困難のある子どものICT活用情報 日本マイクロソフト株式会社. <https://www.microsoft.com/ja-jp/enable/study>
- 国立特別支援教育総合研究所 インクルーシブ教育システム構築支援データベース. <http://inclusive.nise.go.jp/>
- 国立特別支援教育総合研究所 特別支援教育教材ポータルサイト. <http://kyozai.nise.go.jp/>
- 国立特別支援教育総合研究所 発達障害教育推進センター「学習面でのつまずきと指導,支援」. http://cpedd.nise.go.jp/shido_shien

国立特別支援教育総合研究所 N I S E 学びラボ. https://labo.nise.go.jp/Elearning/View/Course/P_Home.aspx

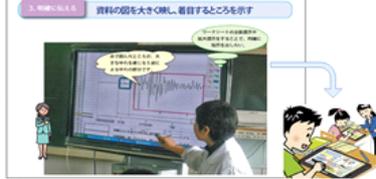
長野県上田養護学校(2017)書字の実態把握～つまずきに気づくために～. http://www1.ueda.ne.jp/~uedayogo/07_siennsitu/PDF/29_08_syojino_jittaihaaku.pdf

文部科学省(2012)「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」調査結果. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf

Watch Headline こどもとIT「教員のICT活用 - こどもとIT」. https://www.watch.impress.co.jp/kodomo_it/teachers/1200837.html

センター研究 3

学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮 —特別支援教育の視点を生かして— (2年計画・2年次)

<p>学びにくさを抱えた児童生徒の理解と学習上の配慮 —特別支援教育の視点を生かして—</p>  <p>秋田県総合教育センター</p>	<p>ICT活用による支援</p>  <p>「デジタル教科書」(教育出版) 漢語アニメーションによって、読み方と 読み方、部首の確認ができる</p> <p>「小学者かんじ・ひびドリル」(NEXTBOOK, Inc.) 1年生から6年生までの漢字を学ぶアプリ。書き 順や読み、読み仮名が学べる。間違えたときには、 アプリが指摘してくれる</p>
<p>ICT活用による支援</p> <p>電子黒板の活用</p>  <p>文部科学省「電子黒板を活用した授業実践に関する調査研究」結果がもっとよくなる電子黒板活用 より</p>	<p>(参考) 作文の4つのつまずきに対応する支援方法</p> <p>4つのつまずき</p> <ul style="list-style-type: none"> ①作文に書くための出来事を思い出すが難しい ②出来事を時系列に並べることが難しい ③何についてどのくらい書けばよいの分からない ④主語と述語の対応や敬詞の使い方がうまくできない <p>対応する支援方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ①写真や動画、パンフレットやしおりなど、思い出すための手掛かりを手元に置いておく ②時系列に沿って出来事を分けられるワークシートを準備する (図1) ③出来事をブロック分けて書く分量を決める (図2) ④空欄を埋めるような形式の下書き用のワークシートを準備する (図3) <p>調査報告(2020) NPO法人「いしな」調査 調査方法(3)2020 ONLINE-3「子どもの発達障害の理解」 調査報告(2020-2021)「発達障害児の教育2020年12月号・2021年1月号」Gakken</p>

副	所	長	赤	坂	亨
主任指導主事(兼)	班	長	宮	野	俊
指	導	主	事	北	島
			鎌	田	祐
			牧	野	幸
			伊	藤	努
			細	谷	林
			小	野	寺
					祐